

「東日本大震災 災害活動報告」

宮城県山元町消防団 団長 伊藤 由信



1 管内被害状況

平成23年3月11日（金）午後2時46分、東北地方太平洋沖（三陸沖）を震源とするマグニチュード9.0という巨大地震が発生、本町では震度6強を観測し、その後、宮城県沿岸に大津波警報が発令されました。

かつてない長く激しい揺れが続き、誰しもが、近い将来発生が予測されていた「宮城県沖地震」の到来を頭に描いたのではないでしょう。

しかし、その約1時間後、想定を遥かに上回る、千年に一度といわれるよもやの大津波が襲来し、平坦で長い海岸線を有する本町は、沿岸部を中心に町の約半分が大津波に飲み込まれ、壊滅的な被害を受けました。

東日本大震災と命名されたこの未曾有の大災害は、平成23年12月21日現在、死者614名、行方不明者3名、全壊家屋2,214棟（うち流出1,013棟）、推定浸水域にかかる人口・世帯数は、それぞれ8,990人・2,913世帯（2月末人口・世帯数の50%以上）という甚大な被害を本町にもたらし、海岸線に整備された堤防がことごとく破壊され、農地も特産のいちご生産農家の90%以上が被害を受けたほか、海水



被災前は海岸線に防潮堤と松林の緑が広がっていた

の冠水等により作付けが不可能となった田も約1,059ha（全体の74%）にのぼり、街の風景は一変しました。

のどかな田園風景や街並みが広がっていた沿岸地区、特に南部は砂漠のような風景と化し、水稻による緑の風景も黄金色の実りも今年は見ることができず、震災前の情景が思い起こせないほどでした。

消防団においても、団員372名（当時）中殉職者10名、消防ポンプ積載車6台及び消防ポンプ置場6棟が流失損壊しました。

2 活動内容

消防団員は、地震発生直後には所属消防ポンプ置場に参集し、担当地区の警戒巡視や被害確認を行いました。また、沿岸の各分団においては、大津波警報が発令された際には担当区域ごとに住民の避難誘導や避難広報にあたる事が定められており、当日もこれらの任務に従事しました。

津波到来後は直ちに救出活動にあたりましたが、大きな余震が断続的に続き、更には津波による浸水のため、腰まで水に浸かりながらの活動を余儀なくされたうえ、流された家



ガレキの山となった田園地帯（笠野地区）



自衛隊を先導する消防団員

屋や流木など、ガレキの山が行く手を塞ぎ、活動は困難を極めました。

翌日には、陸上自衛隊第10師団や緊急消防援助隊が来援し、各隊と連携のもと、救出救助活動や搜索活動に従事しました。

団員の中には、自らも被災し、大切な家族を失った者、避難生活を余儀なくされた者も多数おりましたが、連日のガレキをかき分けながらの救出救助活動に加え、増え続ける死者・行方不明者の搜索活動に従事するなど、消防団員はかつて経験したことのない過酷な状況下に身を置かざるを得ませんでした。そんな現場でも団員同士が協力し合い、無我夢中で懸命に任務と向き合いました。

その後、陸上自衛隊による搜索活動・ガレキ撤去作業が本格化すると、作業を円滑かつ効率的に進め搜索活動の早期進捗を図るため、作業の妨げとなる進入車両の整理や災害対策車両の誘導任務などに従事した他、被災地域の夜間警戒、防疫作業補助、ヘリ発着場

所の整備、被災状況の把握など、多様な任務に柔軟に対応、主に作業補助や側面支援に従事し、人命救助や行方不明者発見等に寄与しました。

3 団長からのメッセージ

今回の震災において、将来を嘱望された若手団員、並びに中堅・ベテラン団員を多く失ったことは、山元町消防団にとって大きな損失であり、深い悲しみで胸が張り裂ける思いとともに痛惜の念を禁じえません。

自らの危険を顧みず果敢に消防団活動に身を投じ、最期まで職務を全うし地域住民の安全確保に努めた彼らの功績は我々の誇りであり、後世に語り継がれるべきものであります。

反面、犠牲となった多くの団員の死を深く反省するとともに、災害時において、団員の身体・生命を守るため、今回の避難誘導や避難広報活動のあり方について検証を行い、然るべき体制の構築と装備の充実を図ることが、私達に求められている喫緊の課題だと痛切に感じております。

最後になりますが、山元町そして山元町消防団は、全国各地からご支援・ご協力をいただき、ゆっくりとではありますが、着実に復興に向けた歩みを進めており、一日も早く復興した姿を皆様にご覧になっていただくことが、多くの皆様のご支援に対する恩返しではないかと考えております。全国の皆様のご支援とご協力に、衷心より感謝と御礼を申し上げます。活動報告とさせていただきます。



ガレキの中での搜索活動



全国から寄贈された積載車を受領いたしました